

鄭和「下西洋」の随行員の事跡

松 浦 章

一 緒 言

一 鄭和の南海遠征と随行員

中国の大航海時代を象徴する出来事は、一五世紀の初めに明の永楽帝によって南海（南シナ海）からインド洋海域諸国やアフリカ東岸諸国にまでも派遣されたとされる鄭和の遠征隊¹⁾を第一にあげなければならぬことは言うまでもない。この研究は最近も行われている。とりわけ中国では専門の南京鄭和研究会があり、専門研究雑誌『鄭和研究』が発刊され、さらに論文集も出版されている。最近のものでは同会編の『走向海洋的中国人—鄭和下西洋五九〇周年国際學術研討會論文集』（北京・海潮出版社、一九九六年四月）が刊行され、鄭和の大遠征と現代化問題から、貿易、文化交流、海上覇権問題、航海術、兵器等の様々な論考が三〇編収められているように、古くて新しい研究題目の一つであることは確かである。しかも未解決の問題が山積している。本稿ではその一として、鄭和の大遠征に参加した武官の記録の一端を明らかにしようとするものである。

鄭和「下西洋」の随行員の事跡

鄭和の遠征隊の規模がどのようなようであったかは、簡単に『明史』の鄭和伝に見ることができる。『明史』卷三〇四、宦官一、鄭和の伝には、

永樂三年六月命〔鄭〕和及其儕王景弘等通使西洋。將士卒二万七千八百余人、多齎金。造大舶、修四十四丈、広十八丈者六十

二。²⁾

とあるように、永樂三年（一四〇五）六月に永楽帝によって西洋に派遣された鄭和は王景弘等を伴い士卒二万七千八百余人を率いたと記されている。『明太宗実録』卷四三、永樂三年六月己卯（十五日）の条には、

遣中官鄭和等齎勅往諭西洋諸国、并賜諸国王金織文綺綵絹、各有差。³⁾

とあるのみで、鄭和に随行した人員の概略等の詳細も不明である。

『明史』に見る二万七千八百余名がその規模を知る有力な証拠となっている。さらに、永楽帝に続いて鄭和を派遣した宣徳帝の時代の記録が知られる。それは宣徳年間の鄭和派遣に関する題本から抄録したと見られる『紀錄彙編』巻二百二、祝允明の「前聞記」に収められた「下西洋」である。同書には、次のように見られる。

下西洋

永楽中、遣官軍下西洋者屢、当時使人有著瀛涯一覽、星槎勝覽二書以記異聞矣。今得宣徳中一事、漫記其概。

題本、文多不録。

人数

官校、旗軍、火長、舵工、班碇手、通事、辦事、書算手、医士、鉄錨、木隄、搭材等匠、水手、民梢人等共二万七千五百五十員名。

里程

宣徳五年閏十二月六日龍灣開船、十日到徐山打圍。二十日、出附子門、二十一日到劉家港。六年二月十六日到長楽港。十一月十二日到福斗山。十二月九日、出五虎門、行十六日。二十四日到占城。七年正月十一日開船、行二十五日。二月六日到爪哇、斯魯馬益。六月十六日開船、行十一日。二十七日到旧港。七月一日開船、行七日。八日到滿刺加。八月八日開船、行十日。十八日到蘇門答刺。十月十日開船、行三十六日。十一月六日到錫蘭山、別羅里。十日開船、行九日。十八日到古里國。二十二日

開船、行三十五日。十二月二十六日到魯乙忽莫斯。八年二月十八日開船回洋、行二十三日。三月十一日到古里。二十日大綜船回洋、行十七日。四月六日到蘇門答刺。十二日開船、行九日。二十日到滿刺加。五月十日回到崑崙洋。二十三日到赤坎。二十六日到占城。六月一日開船、行二日。三日到外羅山。九日、見南澳山。十日晚、望見望郎回山。六月十四日到崎頭洋。十五日到碗碟嶼。二十日過大小赤。二十一日進太倉。後程不録。七月六日到京。十一日、関賜獎衣宝鈔。

船号

如清和、惠康、長寧、安濟、清遠之類、又有数字一二等号。

船名

大八櫓、二八櫓之類。⁽⁴⁾

これは、本来おそらく鄭和が帰国して宣徳帝に報告した題本であったと考えられる。そこから一部を抽出書写したものであることは想像に難くない。他に鄭和の「下西洋」に関する記録があり年月を記した航海記録も多く見られるが、この記録のように具体的な年月日まで記したものは極めて少なく詳細はこの記録より劣るものが大部分である。

また崇禎二年（一六二九）重刻本、嘉靖『太倉州志』（天一閣藏明代方志選刊統編二〇）巻十、雜志には、

太宗文皇帝（永楽帝）命太監鄭和等、統領官兵二万七千名有奇、

駕海船二百八艘、賞賜東南諸蕃、以通西洋。

とあり、「通蕃事蹟石刻」には、

通蕃事蹟石刻在劉家港天妃宮壁間、明宣德六年歲次辛亥春朔、

正使鄭和、王景弘、副使太監朱良、周福、洪保、楊真、左少監

張達、吳忠、都指揮朱弥、王衡等、立辭曰、勅封護國庇民妙靈

昭靈庇弘仁普濟天妃之神威靈、布於鉅海、功德著於太常尚矣。

〔鄭〕和等自永樂初、奉使諸番、今經七次、每統領官兵數萬人、

每船百余艘、自太倉開洋、由占城國・暹羅國、爪哇國、柯枝國、

古里國、抵于西域忽魯謨斯等三千余國、涉滄溟十万余里。

とある。この文は、『吳都文粹統集』（四庫全書所収）卷二八、

「婁東劉家港天妃石刻通蕃事蹟記」にも見えるが、同書には一部節略がある。

「通蕃事蹟石刻」にも「每統領官兵數萬人」とも記されているが、

嘉靖『太倉州志』にも記す二万七千余もの人々を擁して遠征したこ

とは歴然の事実となる。しかし、この派遣に随行した二万七千もの

人々の事跡に関してこれまで少数の人物を除いて不明であった。

ところが、福建師範大学の徐恭生教授が『鄭和研究』に寄稿され

た「鄭和下西洋與『衛所武職選簿』（『鄭和研究』一九九五年第一

期、総第二四期）に、従来看過されていた鄭和の「下西洋」に従事

した多くの人々の事跡を紹介されたのである。徐教授は『衛所武職

選簿』という資料によって明らかにされたが、その資料は北京・故

宮西華門内にある中国第一歴史檔案館に所蔵されている。同館には

一千万件と言われる清代檔案が所蔵されているが、膨大な清代の檔案の数量には劣るものの明代の檔案も約三千数百件所蔵されているとされる。⁵⁾

その明代の檔案の中に兵制に関する重要な史料として「武職選簿」がある。一九三五年の夏に故宮で、その選簿に注視された日本人がいた。それは牧野巽氏である。牧野氏は「此の選簿は、昭和十年夏、北京の故宮を訪れた時、そこにうず高くつまれていた同種の選簿中から、いわばアト・ランダムに取り出して、謄写を依頼したものであった。」と発見のいきさつを記されている。⁶⁾その後、牧野氏の指示によって十数冊の写しが作られ、現在その写しは東洋文庫に収められているのがそれである。

しかし、牧野氏の見られたこの選簿は整理され現在中国第一歴史檔案館に所蔵されているのである。⁷⁾

台湾の台北にある中央研究院歴史語言研究所の明清檔案室の整理中の檔案から最近、武職選簿が発見された。一九九七年九月に整理中の選簿の一部を見せていただいたが北京の中国第一歴史檔案館のものと同じ形式であり、見つかったのは「銅鼓衛選簿」の完本と

「南京龍江衛選簿」、「大河衛選簿」それぞれの一部と考えられる残本のようなであった。

これまで選簿を使用した研究は多く出されているが、その多くは東洋文庫所蔵の選簿に依拠したものである。⁸⁾

武職選簿の中に〈鄭和下西洋〉に関する多くの記録が記されてい

ることを教示されたのは徐恭生教授である。

三 中国第一歴史檔案館所蔵の『武職選簿』

中国第一歴史檔案館所蔵の「衛所武職選簿」は一〇三に分類されたその簿冊は一一一冊ある。その第八六が徐恭生教授によって紹介された『錦衣衛選簿 南京親軍衛』である。

徐教授は『錦衣衛選簿 南京親軍衛』の中から鄭和の遠征に従った三十三名の事跡を抽出し紹介された。中国第一歴史檔案館所蔵の『錦衣衛選簿』はほぼ縦四五・六センチメートル×横四二・三センチメートルで、万曆二十二年（一五九四）鈔本である。

この他にも多くの簿冊が残されている。『錦衣衛選簿』中に見える鄭和の遠征に従事した人物の記事は徐教授が指摘されているが、さらに一九九五年八月、一九九六年八月、十月、一九九七年八月等の数日の間、中国第一歴史檔案館において簿冊を閲覧する機会を得て、徐教授の使用された以外の『錦衣衛選簿』、『高郵衛選簿』、『蘇州衛選簿』、『金山衛選簿』、『福州右衛選簿』、『天津衛選簿』、『羽林衛選簿』等の簿冊にも多くの鄭和「下西洋」関係の記録を見出すことができた。さらに、地方志の中にも「鄭和下西洋」に関する史料を見出したので、ここに紹介したい。なお徐教授の紹介された記事も重複を省みず掲載した。その際は（徐氏一）の形式で指摘した。選簿の番号は中国第一歴史檔案館の登録番号である。

○鄭和下西洋関係の史料

○2之一 『錦衣衛選簿』

- 1 蒲青 新城県人、……蒲旺係蒲青嫡長男、父西洋功未陞、故旺年幼、欽陞〔以下脱〕
- 2 寧原 新城県人、洪武三年、充儀儀司校尉、三十五年、小旗、永楽元年、撥錦衣衛衣衛衣左所班釵司帶管、三年西洋公幹、五年陞総旗、十年西洋公幹、十三年陞錦衣衛衣左所班釵司試百戸。

○41 『高郵衛選簿』

- 1 王捨保 年參拾貳歳、定海県人、……王忠、年拾六歳、係捨保嫡男、父因貳次差往西洋公幹回還、永楽拾四年陞本所副千戸、復下西洋等国公幹回還。拾八捌年、陞正千戸。
- 2 鍾信 宣徳五年八月、鍾慶係高郵衛衣左所試百戸、鍾信戸名鍾得舒嫡長男、父原係総旗因下西洋、厮殺有効、陞除前職欽准本人替実授世襲百戸。

○43 『蘇州衛選簿』

- 1 許興（閩県人）許成係蘇州衛中所試百戸、許興嫡長男、父原係総旗、因下西洋、於沙岸與幹刺対敵厮殺有功、除前職、欽准本人替襲実授世襲百戸。
- 2 黄受（高安県人）永楽九年征西洋、欽陞蘇州衛中所試百戸。

黄琛係黄受嫡長孫、祖永楽十二錫蘭山陣亡、父黄信十四年襲実

授百戶。

○44 『金山衛選簿』

- 1 孫閏 (山陰縣人) 永樂三年、綿花洋殺獲賊船、阿魯洋擒殺賊寇有功、陞小旗、十五年陞總旗、十六年復下西洋、十八年陞試百戶。
 - 2 胡旺 (江都縣人) 永樂元年、陞小旗、四年西洋公幹、旧港殺賊有功、陞總旗、八年蘇門答剌等處殺賊、陞百戶。
- 54 『福州右衛選簿』
- 1 韓大 韓貴 (河內縣人) 宣德八年二月、韓貴係福州右衛左所試百戶、韓大嫡長男、父原係總旗、因下西洋、於白沙岸與蘇幹刺對敵廝殺有功、除前職、病故、欽准本人襲授世襲百戶。
 - 2 李隆成 (新寧縣人) 李隆成補役永樂三年(一四〇五) 西洋公幹、四年旧港外洋、殺獲功陞小旗、五年公幹、七年陞總旗、九年西洋公幹、十三年陞試百戶。
 - 3 蔡肅 (懷安縣人) 永樂十三年十二月、蔡肅原係福州右衛左所總旗、因二次下西洋等處、回還、永樂十三年九月二十四日欽陞本衛所試百戶。……(蔡肅) 原係總旗因下西洋於白沙岸與蘇幹刺對敵廝殺有功、陞除前職。
 - 4 夷得名 (塩城縣人) 宣德十年八月夷福係福州右衛左所試百戶、夷得名親姪叔原係總旗、下西洋公幹、於白沙岸與蘇幹刺對敵廝殺有功、陞除前職。
- 5 殺有功、陞除前職、欽准本人替實授百戶。
林拱 (福寧縣人) 宣德八年四月、林春係福州右衛左所試百戶、林拱嫡長男、父原係總旗、因下西洋公幹、陞除前職、病故、欽准本人仍襲試百戶。
 - 6 羅墨伍 (福清縣人) 宣德十年二月、羅恭係福州右衛右所試百戶、羅墨伍嫡長男、父原係總旗、因下西洋公幹、回還、陞除前職、欽准本人仍襲試百戶。
 - 7 萬將軍保 (江夏縣人) 永樂二年六月萬鑑十七歲、係福州右衛中所試百戶、萬將軍保嫡長男、父原係總旗、因下西洋、陞除前職、病故、欽准本人仍襲副千戶試百戶。
 - 8 陳真生 (南豐縣人) 陳真生役永樂四年(一四〇六) 小葛刺國旧港等洋有功、陞總旗、七年等年阿枝國并蘇門答刺公幹有功、十三年陞試百戶、宣德二年交趾昌江陣亡。
 - 9 李進保 (閩縣人) 李進保補役、永樂三、四年(一四〇五、一四〇六) 西洋旧港等處有功、陞小旗、復往西洋、九年陞總旗、十一年石里等國公幹、有功陞試百戶。
 - 10 蒲媽奴 (晉江縣人) 宣德九年十月蒲榮年十七歲、係福州右衛後所試百戶、蒲媽奴嫡長孫、祖原係總旗、因下西洋公幹、回還、陞除前職、欽准本人仍襲試百戶。
 - 11 鄭受保 (同安縣人) 鄭受保補役、永樂三年(一四〇五) 西洋等國公幹有功、陞總旗、七年(一四〇九) 錫蘭山等國、陞總旗、十一年(一四一三) 西洋忽魯等國公幹、十三年陞試百戶。

〇70 『天津衛選簿』

- 1 張文言 (応山県人) 張翔係張文言嫡長男、父因二次下西洋、永樂十三年陞福千戸。

〇84 『羽林右衛選簿』

- 1 舒鑑 (香河県人) 舒鑑係舒敏嫡長孫、永樂元年、陞副千戸、因二次下西洋、拾三年功陞正千戸、復下西洋、拾八年、陞流官指揮僉事。洪熙元年調羽林右衛。
- 2 吳全 (南城県人) 永樂元年併勝充小旗、五年西洋公幹、充總旗、十二年征進蘇門白沙岸有功、陞試百戸。

〇86 『錦衣衛選簿』 (徐氏1…は徐教授の論文に見える番号)

- 1 何義宗、江都県人、先因年間為兵革随父何仲賢、到於占城充目、洪武十九年差做通事、跟占城王子、管領船隻、到京回還本国、二十年仍同使臣進象欽賞段疋、回至広東、蒙勘合取回、二十一年欽留提調操、練象隻、撥充錦衣衛中右所總旗、三十年占城國招諭、引領占領王子等、赴京朝覲、三十五年往爪哇國、永樂元年回還、欽陞錦衣衛馴象所百戸、八月往西洋等國、三年回還、陞馴象所副千戸、本年欽授流官職事、八月往西洋等処公幹、四年(一四〇六)旧港・阿魯等処殺賊衆、五年陞本衛所正千戸、十一月爪哇・西洋等処公幹、七年復選下西洋、八月敬陞本衛指揮僉事。(徐氏1)

- 2 李滿、武進県人、有伯父李大成、丁酉(元・至元十七年、一三五七)從軍、二十三年老将滿代役、三十二年攻圍濟南、陞小旗

西水寨、陞總旗、三十五年渡江除旗手衛中所百戸、永樂元年、陞本所副千戸、二年欽与世襲、三年調錦衣衛衣左所、本年(永樂三、一四〇五)西洋公幹、有功陞本衛所正千戸。(徐氏2)

- 3 張通 張漢、新城県人、曾祖父張通、洪武三十四年充儀衛司校尉、三十五年平定京師、陞小旗、永樂四年(一四〇六)往西洋等國、節次殺賊船、五年陞試百戸、九年往錫蘭山國、殺退番賊、陞正千戸、十年(一四一二)征西洋白沙岸、对敵有功、十三年陞指揮僉事。(徐氏4)
- 4 宗信可、年二十一歳、南京錦衣衛指揮僉事、原籍交趾清華府、一世祖宗忠同、二世祖宗真、洪武六年進真忠渾故、宗真到於占

城、封充頭目、九年差領牙象進貢、二十年與小旗操後撥錦衣衛中右所、二十三年伊鎗充本衛所官象總旗、三十五年往暹羅國功、永樂元年除本衛所世襲實授百戸、本年往西洋公幹、三(一四〇五)年除本衛世襲副千戸、本年阿魯洋殺獲賊船功、五年陞本衛所世襲正千戸、十年往西洋公幹功、十三年陞本衛所流官指揮僉事。(徐氏5)

- 5 余英、鄱陽県人、祖余復亨、洪武十九年充軍、三十三年招募陞實授百戸、三十四年西水寨、陞副千戸、三十五年金川門陞旗手衛正千戸、永樂元年為事仍復百戸、五年調南京錦衣衛、七年(一四〇九)西洋公幹、陞副千戸、十年西洋公幹、十三年陞正

- 千戶、十四年西洋公幹、十七年陞指揮僉事。(徐氏6)
- 6 鐘左、年四十九歲、係南京錦衣衛指揮僉事、原籍廣東廣州府東莞縣人、始祖鐘海清、永樂五年、應招率領本管頭目人、船隨同前來朝見、陞正千戶、撥錦衣衛帶俸、十三年、西洋二次有功、陞指揮僉事。(徐氏7)
- 7 何得清、歸善縣人、遠年間流移舊港住過、永樂四年、蒙千戶楊信奉勅諭、到得清順招本官頭目前來朝、欽除正千戶、仍回舊港招諭、五年、撥錦衣衛鎮撫司帶俸、十四年復往西洋、忽魯謨斯等國公幹、欽陞錦衣衛流官指揮僉事。(徐氏8)
- 8 劉京、新城縣人、曾祖父劉海、洪武三十四年、投充小旗、三十五年陞錦衣衛總旗、永樂四年、陞試百戶、九年(一四一一)錫蘭山、陞正千戶、十二年以西洋功、陞指揮僉事。(徐氏9)
- 9 李真、東莞縣人、遠年該福邇臣國奉勅招諭、永樂七年除授百戶、十年西洋公幹、十四年仍往西洋公幹、十八年欽陞錦衣衛鎮撫。(徐氏10)
- 10 鐘二 宣德九年六月、鐘貴係錦衣衛鎮撫司帶至急俸百戶、鐘二嫡長男父原、係舊港招諭到京、除授前職、今為老疾、欽准本人替職。
- 11 陳蘭芳 陳熙、松陽縣人、有父陳蘭芳、洪武二十五年、充校尉、二十六年調儀衛司、三十二年、陞小旗、永樂二年、錦衣衛鎮撫司帶營、五年往爪哇等國公幹、七年陞總旗、本年(一四〇九)復往西洋公幹、十三年欽陞試百戶、本年老職係嫡長男。
- 12 劉定住 劉讓、房山縣人、父劉定住、洪武三十二年、充校尉、三十三年功陞小旗、永樂二年、陞總旗、七年差往西洋國公幹、十五年欽陞試百戶。(徐氏11)
- 13 張貴 宣德三年八月、張耀年十五歲係錦衣衛中所試百戶張貴嫡長男、父原係總旗、因下西洋、陞除前職、病故、欽准本人仍襲試百戶。
- 14 何玉(新城縣人)何興係何玉親姪伯、永樂十年西洋功、陞副千戶、十七年西洋二次功、陞正千戶。(徐氏12)
- 15 袁亨 宣德二年八月、袁敬年十六歲、係錦衣衛衣左千戶所百戶袁亨嫡長男、父下西洋、有功未陞、病故、本人先因年幼、已陞副千戶、俸優給、今出幼、欽准襲流官副千戶。
- 16 張文 宣德三年六月、張通年十五歲、係錦衣衛衣右千戶所百戶、張文嫡長男、父原係百戶、因下西洋、獲功未陞、病故、已陞本人副千戶、俸優給、今出幼、欽准襲流官副千戶。
- 17 徐興、新城縣人、洪武年、報効充校尉小旗、三十五年陞總旗、永樂七年往西洋公幹、十三年陞試百戶。(徐氏13)
- 18 胡謙 胡禎、奉化縣人、祖胡謙、洪武二十四年軍、永樂四年舊港等處、殺族有功、陞小旗、九年回船沿途、殺賊有功、陞總旗、十年西洋公幹、十二年陞試百戶。(徐氏14)
- 19 刁先 刁英年二十九歲、棲霞縣人、曾祖父先、永樂元年、充力士、九年殺退番賊奇功、陞總旗、十三年西洋二次有功、陞試百戶。(徐氏15)

- 20 鄭興 (順天府宛平縣人) 鄭興……永樂九年殺退番賊有功, 本年七月陞試百戶, 十二年下西洋有功, 未陞, 病故。(徐氏16)
- 21 姚全 (新城縣人) 永樂三年公幹, 五年陞總旗, 仍往公幹, 九年陞錦衣衛右所實授百戶, 十年復往公幹, 十三年陞副千戶又往西洋, 十七年陞正千戶。
- 22 尹仲達 (香山縣人) 永樂四年隨招諭千戶楊信赴京, 本年陞正千戶錦衣衛鎮撫司帶俸, 十五年(一四一七)西洋公幹。(徐氏18)
- 23 張政 (通州人) 正統九年八月, 張海保南京錦衣衛錦衣右所敬蓋司試百戶, 張政嫡長男, 父原係總旗, 二次下西洋, 於白沙岸與蘇幹刺斃有功, 回陞前職, 欽准本人替實授世襲百戶。(徐氏19)
- 24 答成 (新城縣人) 答成……永樂三年旧港等處有功, 陞試百戶。(徐氏20)
- 25 王真 (龍岩縣人) 王真永樂二十年選跟太監王景弘等下西洋公幹, 擒獲偽王蘇幹喇等節次有功回還, 永樂二十二年陞錦衣衛左所正千戶。(徐氏21)
- 26 劉福才 宣德二年五月, 劉全年十七歲, 係錦衣衛衣前千戶, 帶支俸流官百戶, 劉福才嫡長男, 父因下西洋, 錫蘭山獲功, 未陞, 病故, 先次已陞本人副千戶, 俸優給, 今出幼, 欽准襲流官副千戶。
- 27 張原, 永樂五年, 併陞小旗, 七年陞總旗, 九年(一四一一)錫蘭山陣亡。無兒男, 葛住係親弟蒙本衛所保送兵部, 查張原錫蘭山陣亡, 奏陞總旗試百戶。
- 28 陳永華 (廣東廣州府東莞縣人) 陳永華, 永樂三年差旧港招諭金仲禮等, 五年陞副千戶, 六年撥錦衣衛鎮撫司帶俸, 十七年(一四一九)西洋等處有功, 十八年四月陞正千戶。(徐氏22)
- 29 沈友, 新城縣人, ……永樂九年殺敗番賊, 陞錦衣衛衣中所, 實授百戶。(中略) 宣德二年八月沈旺年十六歲, 係錦衣衛衣中千戶所流官百戶沈友嫡長男, 父下西洋, 有功未陞, 病故, 本人先因年幼已副陞千戶, 俸優給, 今出幼, 欽准襲流官副千戶。
- 30 易文整 (東安縣人) 易文整, ……永樂九年(一四一一)西洋功, 陞實授百戶, 十年西洋公幹, 十三年陞副千戶。(徐氏23)
- 31 張和, 武進縣人, ……張浩, 張和庶長孫, 祖原係總旗革除年間除百戶, 西洋公幹, 回陞副千戶, 復下西洋, 回陞正千戶。(徐氏24)
- 32 劉受 (高平縣人) 劉受, ……永樂七年(一四〇九)西洋公幹, 陞試百戶, 節次西洋公幹, 陞實授百戶。(徐氏25)
- 33 劉春 (新建縣人) 劉春……「永樂」九年(一四一一)錫蘭山有功, 陞百戶。(徐氏26)
- 34 張林 (永清縣人) 張林……「永樂」七年(一四〇九)選充下西洋, 陞試百戶。(徐氏27)
- 35 劉移住 (西安府華陰縣人) 劉移住, ……永樂七年(一四〇九), 選下西洋公幹, 八年至錫蘭山國給賜, 九年為國王亞烈苦奈兒, 悖逆奪官軍錢糧, 就行征勦擒國王, 殺敗番賊回還, 本年陞總旗, 十年復下西洋公幹, 十二年(一四一四)至蘇門答刺,

閏九月白沙岸與蘇幹刺對敵斃、回還、十三年欽陞錦衣衛中後所試百戶、宣德五年、仍往西洋公幹、八年（一四三三）回還、

患手足殘疾、〔劉〕銘係嫡長男、九年欽准替授錦衣衛中後所実授世襲百戶。（徐氏28）

36 蔡榮（広東海陽県人）蔡榮、永樂三年庶旧港招諭、……十年西洋公幹。（徐氏30）

37 李青……原係総旗、因下西洋公幹、回還、陞除前職、病故。

38 陶旺、原係下西洋有功。（徐氏31）

39 張慮、深沢県人、洪武三十年、充錦衣衛力士、永樂五年西洋公幹、七年陞小旗、九年征勦檣番、陞錦衣衛後所試百戶。（徐氏32）

四 天啓『海塩県図経』の鄭和

「下西洋」史料

明・天啓四年（一六二四）刊『海塩県図経』巻十、官師篇第五下、皇明の項目に鄭和の下西洋に同行した武官の名前が見られる。関係する人物の事跡を抄録列記してみる。同書、海寧衛の項に引用する王文祿の「衛職黄志」に、

武職、自公侯伯、下指揮、千、百戸、視子男世襲。指揮上有把總、參將、總兵、都督。流官不世襲。指揮有使、有同知、有僉事、千戸有正、有副。百戸有試、有冠帶。……有開國功、靖難功、征蛮功、平寇功、下西洋功、海運功、開屯功。……とあるように、武官の組織とその功績例を挙げている。本稿ではこ

の内の「下西洋功」に関した人物を上げてみた。

1 沈仁志（左所 百戸）、黄巖人、洪武七年、編水軍衛、……子亜頭補、永樂十七年（一四一九）征西洋、陞百戸。

2 范興（右所 百戸）、夏津人、編鷹揚衛、永樂四年（一四〇六）征交趾、下西洋、十二年（一四一四）陞試百戸。

3 朱尾達（右所 百戸）、漳浦人、洪武五年、編長淮衛、調水軍、永樂四年（一四〇六）下西洋征夷、十八年（一四二〇）陞百戸。

4 王福一（中所 百戸）、会稽人、……子亜員補、〔洪武〕十七年、至永樂十二年（一四一四）下西洋、陞試百戸。

5 沈貴（後所 千戸）、麻城人、至正癸卯（二十三年、一三六三）帰隸水軍衛、没。子瘦兒補、永樂七年（一四〇九）征西洋、陞小旗、又征西洋、陞試百戸。

6 林景清（激浦所 千戸）、海豊人、洪武十六年編隸鎮南衛、子公保代、征南、歿。弟公養、補調江陰衛、永樂中下西洋、陞総旗、征忽魯謨斯国、陞試百戸。

7 黄子成（激浦所 百戸）、東莞人、洪武十六年、募隸鎮南衛、海運歿、子本奴、補。下西洋、陞総旗、又征西洋、永樂七年（一四〇九）陞百戸。

8 朱祥三（乍浦所 千戸）、永嘉人、至正丁未（二十七年、一三六七）帰隸水軍衛。子亜文補、永樂中、征西洋爪哇国、十八年（一四二〇）授試百戸。

- 9 楊僧兒(乍浦所 百戸)、東河人、……子正、補、靖難累功、陞鳳陽衛百戸、永樂七年(一四〇九)征交趾、歿。
- 10 陶小乙(乍浦所 百戸)、滁州人、……子九、補。〔洪武〕十九年、至永樂十二年(一四一四)下西洋白沙岸戰捷、陞総旗、十四年(一四一六)陞試百戸。
- 11 劉大(乍浦所 百戸)、儀真人、至正丙申(十六年、一三五六)歸隸江陰衛、子斌、補、永樂三年(一四〇五)下西洋、陞小旗、九年(一四一一)西洋錫蘭山谷擒王、陞百戸。

五小 結

上述のように鄭和「下西洋」に關係した武職についていた人物の史料を中国第一歴史檔案館に所蔵されている『武職選簿』の内、『錦衣衛選簿』、『高郵衛選簿』、『蘇州衛選簿』、『金山衛選簿』、『福州右衛選簿』、『天津衛選簿』、『羽林右衛選簿』、『錦衣衛選簿』等八點の選簿及び地方志の天啓『海塩県図經』の中より見いだした七十二名の記録を抽出紹介した。

これらの随行員はいずれも永樂三年(一四〇五)から宣德八年(一四三三)にわたる鄭和の七回に及ぶ西洋派遣に随行した人々で、一度だけでなく二度以上も同行した人物が多く含まれ、三度も同行した『高郵衛選簿』に見える王捨保や『羽林衛選簿』に見える舒鑑、さらに『錦衣衛選簿』に見る劉移住は四度も同行している様な人物を見出すのである。このことから、統率者の鄭和のみならず当然、

海外諸国への航海経験者が優先されたことは歴然であろう。

これら選簿中に見える随行した武官等の主要な記録は、当然ながら海外での武功が記されている。とりわけ、『錦衣衛選簿』の劉移住の記事中に「永樂七年(一四〇九)、選下西洋公幹、八年至錫蘭山国給賜、九年為国王亞烈苦奈兒、悖逆奪官軍錢粮就行征勦擒国王、殺敗番賊回還」とあるように、永樂九年(一四一一)頃の錫蘭山の戦いに関するものが多いのである。今日のスリランカに比定される錫蘭国に関して、『明史』卷三二六、列伝二二四、外国七に、

永樂中、鄭和使西洋至其地、其王亞烈苦奈兒欲害〔鄭〕和、和覺、去之他国。王又不睦隣境、屢邀劫往來使臣、諸蕃皆苦之。

及和歸、復經其地、乃誘和至國中、發兵五万劫〔鄭〕和、塞歸路。〔鄭〕和乃率步卒二千、由間道乘虛攻拔其城、生擒亞烈苦奈兒及妻子、頭目、獻俘於朝。

とあるように、鄭和の遠征隊は、錫蘭山王から厚遇を受けなかったため間もなくその国を離れたが、また歸路に際し寄港した。しかしその際、錫蘭山王から五万の兵で攻撃を受けた。これに対し鄭和は二千の兵で勝利を収めその王や妻子等を捕虜として、明廷に献上したとある。上記の嘉靖『太倉州志』卷十、雜誌にも、永樂七年(一四〇九)の遠征に際しての記事中に、

永樂七年、統領舟師、往前各国道經錫蘭山国其王亞烈苦奈兒、負固不恭、謀害舟師、頼神明顯心知覺逐生擒其王、至九年、帰献、尋蒙恩宥俾復歸国。

とあるように、鄭和の遠征における大きな戦闘の一つであったことは確かである。この戦いで錫蘭山王を捕虜として永楽九年に帰国している。この記事に関しての詳細は、『太宗実録』巻百十六、永楽九年（一四一一）六月乙巳（十六日）の条に見える。

内官鄭和等使西洋諸番國還、獻所俘錫蘭山國王垂烈苦奈兒并其家屬。

とあるように、錫蘭山王とその家屬を捕虜として帰国している。これは鄭和の永楽七年から永楽九年までの遠征中のことであった。同実録によれば、戦いにおいて錫蘭山側は「潜発番兵五万余劫〔鄭〕和舟」と五万の兵を發して鄭和の船団を襲撃したのである。これに対して鄭和は「躬率所領兵二千余由間道急攻土城、破之」と二千の兵で攻撃したのである。

天啓『海塩県図経』に見える劉大のように「永楽三年、下西洋、陞小旗、九年、西洋・錫蘭山谷擒王、陞百戸」とあるように、劉大は永楽九年に小旗から試百等を飛び越し一挙に百戸に昇進したのであった。⁹⁾外地勤務も加算されたと思われるが永楽九年の錫蘭山の戦闘で功績を挙げたことが大きかったことは想像に難くない。

上述のことからも明らかのように選簿に記載された短い戦闘の記録は、『明史』や『太宗実録』に記載された記事とも符合することは歴然である。

しかし、ここに紹介したのは残存の選簿の一部に過ぎず、まだ多くの記録が残されている可能性が高いと思われる。とりわけ、中国

鄭和「下西洋」の随行員の事跡

第一歴史檔案館に所蔵されている選簿の量からみて多くの興味深い史実を発見することは可能である。¹⁰⁾今後、組織的な調査が行われることにより、多くの明代史研究者に多大の裨益を与えるものと思われる。

註

(1) 鄭和に関する專著には次のものがある。

山本達郎氏『鄭和の西征』『東洋学報』第二一卷三・四号、一九三四年四、九月。

朱契氏『鄭和』三聯書店、一九五六年十月。

橋本敬造氏『鄭和の航海―その航海法について―』『東方学報（京都）』第三九冊、一九六八年三月。

鄭鶴声氏『鄭和遺事彙編』台湾中華書局、一九七〇年三月。

家島彦一氏「十五世紀におけるインド洋通商史の一齣―鄭和遠征分隊のイェメン訪問について―」『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究』第八号、一九七四年。

家島彦一氏『海が創る文明―インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社、一九九三年四月、「東からの挑戦―鄭和をメッカに導いたものは何か―」二四三―二七三頁。

寺田隆信氏『鄭和―中国とイスラム世界を結んだ航海者』清水書院、一九八一年八月。

范中義氏・王振華氏『鄭和下西洋』海洋出版社、一九八二年八月。
張研氏『鄭和下西洋』台北・雲龍出版社、精典歴史書系列一二、一九九二年九月。

ルイーズ・リヴァーンズ氏著、君野隆久氏訳『中国が海を支配したとき―鄭和とその時代』新書館、一九九六年五月。原著は Louise Levathes, *When China Ruled the Seas: the Treasure Fleet of*

the Dragon Throne 1405-1433, Simon & Schuster, 1994. である。

宮崎正勝氏『鄭和の南海大遠征 永楽帝の世界秩序再編』中公新書二二七一、一九九七年七月。

(2) 『明史』第二十六冊、中華書局、七六六～七七六七頁。

(3) 中央研究院歴史語言研究所本、六八五頁。

(4) 本書は百部叢書集成の記録彙編によった。『国朝典故』巻六十二、前聞記、北京大学出版社、一九九三年四月、中冊、一四一五～一四一六頁参照。

(5) 『中国第一歴史檔案館藏檔案概述』檔案出版社、一九八五年六月、三頁参照。

(6) 牧野巽氏「明青州左衛選簿について」(『岩井(大憲)博士古稀記念典籍論集』大安、一九六三年六月。『中国社会学史の諸問題 牧野巽著作集第六巻』御茶の水書房、一九八五年十月再録。

(7) 松浦章「中国第一歴史檔案館所蔵『錦衣衛選簿 南京親軍衛』について」『滿族史研究通信』第五号、一九九五年十二月、二六～三三頁。

(8) これまで武職選簿を使用した研究には管見のかぎり次のものがある。張鴻翔氏「明外族賜姓統考」『輔仁學誌』第四卷第二期、一九三四年六月。

川越泰博氏①「明代女真軍官考序説―『三万衛選簿』の分析を通して―」『史苑』三八巻一・二号、一九七八年。②「明代衛所官の都司職任用について―衛選簿を中心に―」『中央大学文学部紀要』史学科二四、一九七九年。③「明代衛所官の世襲状況について―『衛選簿』の分析を通して―」『多賀秋五郎博士古稀記念論文集アジアの教育と社会』不味堂、一九八三年。④「明代衛所官の来衛形態について―玉林衛の場合―」『アジア諸民族における社会と文化』(岡本敬二先生退官記念論集)一九八四年八月。⑤「明代衛所官の来衛形態について―西安左衛の場合―」『中央大

学文学部紀要』史学科第三〇号、一九八五年三月。⑥「明代衛所の舍人について―『衛選簿』の分析を通して―」『中央大学文学部紀要』史学科第三二号、一九八六年三月。⑦「明代衛所官の借職と世襲制度」『中央大学文学部紀要』史学科第三四号、一九八九年。⑧「明代優養制の研究―衛所官研究の一節として―」『中央大学文学部紀要』史学科第三六号、一九九〇年二月。⑨「靖難の役における建文帝麾下の衛所官について」『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所)第一号、一九九〇年八月。

楠木賢道氏①「明朝の遼東支配と三万衛―明初の女直軍官をめぐる―」『史境』九、一九八四年一月。②「明代三万衛女直軍官の動向―永楽二〇年の開原事変における二つの行動パターンをめぐって―」『史峯』創刊号、一九八八年七月。

于志嘉氏「明代軍戸世襲制度」台湾学生書局、一九八七年四月。顧誠氏「談明代的衛籍」『北京師範大学学报(社科版)』一九八九年第五期。

徐恭生氏「鄭和下西洋與『衛所武職選簿』」(『鄭和研究』(南京)一九九五年第一期、総第二四期)。

松浦章①「関于鄭和下西洋的隨員」『鄭和研究』(南京)一九九六年第二期(五月)。②『武職選簿』に見る鄧茂七の乱』『滿族史研究通信』第六号、一九九六年三月。

(9) 昇進の序列として一般的には「指揮使・指揮同知・指揮僉事・正千戸・副千戸・実授百戸・試百戸・署百戸・冠帶總旗・小旗」が見られる。各選簿及び張徳信氏『明朝典制』吉林文史出版社、一九九六年一月、四〇五～四〇七頁参照。

(10) 松浦章『武職選簿』に見る鄧茂七の乱』『滿族史研究通信』第六号、一九九七年三月、三二～三五頁。

松浦章『蘇州衛選簿』に見る倭寇』『関西大学東西学術研究所所報』第六号、一九九八年三月、一～二頁。

鄭和下西洋隨行員派遣表

姓名	西曆	中國曆	派遣年次	派遣內容	出典	本貫
劉大	一四〇五	永樂三年	永樂三、九年	錫蘭山功	海塩県図経一一	儀真県
黃子成	一四〇五	永樂三年	永樂三、五年	下西洋	海塩県図経七	東莞県
管成	一四〇五	永樂三年	永樂三年	旧港功績	錦衣衛二四	新城県
何義宗	一四〇五	永樂三年	永樂三、四、七年	西洋公幹	錦衣衛一	江都県
宗信可	一四〇五	永樂三年	永樂三、一〇年	阿魯洋功績	錦衣衛四	交趾清華府
孫閏	一四〇五	永樂三年	永樂三、一六年	綿花洋、阿魯洋功	金山衛一	山陰県
陳永華	一四〇五	永樂三年	永樂三、一七年	旧港招諭	錦衣衛二八	東莞県(広州府)
鄭受保	一四〇五	永樂三年	永樂三、四、一一年	西洋公幹	福州一一	同安県
李滿	一四〇五	永樂三年	永樂三年	西洋公幹	錦衣衛二	武進県
李進保	一四〇五	永樂三年	永樂三、四、七年	旧港等功績	福州九	閩県
蔡榮	一四〇五	永樂三年	永樂三、一〇年	西洋公幹	錦衣衛三六	海陽県(広東)
寧原	一四〇五	永樂三年	永樂三、一〇年	西洋公幹	二錦衣衛二	新城県
李隆成	一四〇五	永樂三年	永樂三、七、九年	旧港功績	福州二	新寧県
胡旺	一四〇六	永樂四年	永樂四年	西洋公幹	金山衛二	江都県
何得清	一四〇六	永樂四年	永樂四、一四年	西洋公幹	錦衣衛七	帰善県
胡謙	一四〇六	永樂四年	永樂四、一〇年	西洋公幹	錦衣衛一八	奉化県
朱尾達	一四〇六	永樂四年	永樂四年	下西洋征夷	海塩県図経三	漳浦県
張通	一四〇六	永樂四年	永樂四、五、一〇年	錫蘭山功績	錦衣衛三	新城県
范興	一四〇六	永樂四年	永樂四年	下西洋	海塩県図経二	夏津県

鄭和「下西洋」の隨行員の事跡

何玉	劉春	劉海	鄭興	沈友	張原	黃受	易文整	刁先	劉定住	劉移住	劉受	楊僧兒	余復亨	陳真生	沈貴	張林	徐興	陳蘭芳	張慮	吳全
一四二二	一四二一	一四二一	一四二一	一四二一	一四二一	一四二一	一四二一	一四二一	一四〇九	一四〇九	一四〇九	一四〇九	一四〇九	一四〇九	一四〇九	一四〇九	一四〇九	一四〇七	一四〇七	一四〇七
永樂一〇年	永樂九年	永樂九年	永樂九年	永樂九年	永樂九年	永樂九年	永樂九年	永樂九年	永樂七年	永樂七年	永樂七年	永樂七年	永樂七年	永樂七年	永樂七年	永樂七年	永樂七年	永樂五年	永樂五年	永樂五年
永樂一〇、一七年	永樂九年	永樂九年	永樂九、一二年	永樂九年	永樂九年	永樂九年、一二年	永樂九、一〇年	永樂九、一三年	永樂七年	永樂七、一〇、一二、宣德五年	永樂七年	永樂七年	永樂七、一〇、一四年	永樂七、一四、宣德二年	永樂七年	永樂七年	永樂七年	永樂五、七年	永樂五年	永樂五年
二次功績	錫蘭山功績	錫蘭山功績	二次功績	西洋公幹	錫蘭山戰死	征西洋、錫蘭山陣亡	西洋公幹	二次功績	西洋公幹	西洋公幹	節次西洋公幹	征交趾	西洋公幹	旧港等功績	征西洋	下西洋	西洋公幹	西洋公幹	西洋公幹	西洋公幹
錦衣衛一四	錦衣衛三三	錦衣衛八	錦衣衛二〇	錦衣衛二九	錦衣衛二七	蘇州衛二	錦衣衛三〇	錦衣衛一九	錦衣衛一二	錦衣衛三五	錦衣衛三一	海塩県図經九	錦衣衛五	福州八	海塩県図經五	錦衣衛三四	錦衣衛一七	錦衣衛一一	錦衣衛三九	羽林右衛門二
新城県	新建県	新城県	宛平県(順天府)	新城県		高安県	東安県	棲霞県	房山県	華陰県(西安府)	高平県	東河県	番洋県	南豊県	麻城県	永清県	新城県	松陽県	深沢県	南城県

李真	一四二二	永樂一〇年	永樂一〇、一四年	西洋公幹	錦衣衛九	東莞県
王福一	一四二四	永樂一二年	永樂一二年	下西洋	海塩県凶経四	会稽県
陶小乙	一四二四	永樂一二年	永樂一二年	下西洋白沙岸	海塩県凶経一〇	滁州
尹仲達	一四二七	永樂一五年	永樂一五年	西洋公幹	錦衣衛二二	香山県
沈仁志	一四二九	永樂一七年	永樂一七年	征西洋	海塩県凶経一	黄巖県
王真	一四二二	永樂二〇年	永樂二〇年	王景弘西洋	錦衣衛二五	龍巖県
鐘二				旧港招諭	錦衣衛一〇	
王捨保				三次西洋公幹	高郵衛一	定海人
鍾信				西洋公幹	高郵衛二	
許興				下西洋	蘇州衛一	閩県
蒲青				西洋功	二錦衣衛一	新城県
夷得名				西洋白沙岸功績	福州四	塩城県
蒲媽奴				西洋公幹	福州一〇	晋江県
韓大				西洋・白岸功勞	福州一	河内県
鐘海清				西洋公幹	錦衣衛六	東莞県(広東)
張貴				西洋公幹	錦衣衛一三	
張政				二次功績	錦衣衛二三	通州
張文				西洋公幹	錦衣衛一六	
張和				西洋公幹	錦衣衛三一	武進県
張文言				二次西洋下	天津一	応山県
陶旺				下西洋	錦衣衛三八	

羅 墨 伍				西洋公幹	福州六	福清県
李 青				西洋公幹	錦衣衛三七	
劉 福 才				西洋公幹	錦衣衛二六	
林 拱				西洋公幹	福州五	福寧県
萬將軍保				西洋公幹	福州七	江夏県
蔡 肅		永樂一二年前		二次西洋	福州三	懷安県
姚 全		(永樂三、五、十、十三年)		往西洋	錦衣衛二一	新城県
袁 亨				西洋公幹	錦衣衛一五	
舒 鑑		永樂中		三次西洋公幹	羽林右衛簿一	香河県
朱 祥 三		永樂中		征西洋	海塩県図経八	永嘉県
林 景 清		永樂中		下西洋	海塩県図経六	海豊県

(注) 出典の二『錦衣衛選簿』は二一の『錦衣衛選簿』である。各簿冊の後の数字は、上記の各簿の掲載順を示す。中国暦は判明した初次の派遣のみを西暦にして示した。

〔付記〕 本稿作成に当り『武職選簿』の閲覧を許可された中国第一歴史檔案館に対し末筆乍ら謝意を表する次第ある。